

# 文化と育み発信する だいちとにわの震災メモリアルホール

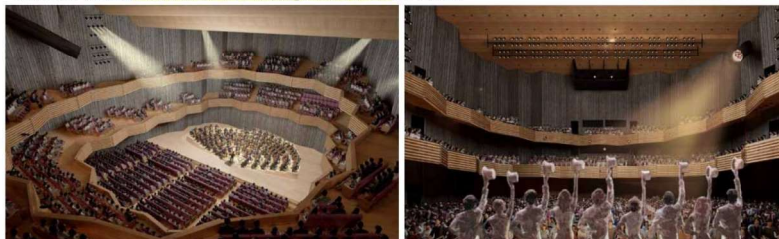
文化する新たな音楽ホールは仙台の復興の象徴であり、これからの街の未来を担っていくものである必要があると私たちは考えます。これまでの自然災害を乗り越えてきた仙台の街のよう、地面に強く根付いて自然の力を強くまかす。丘陵の上で建つ景観による建築は仙台の人々にとって親しみやすく、青葉山から東部仙台「文化」と「平和」を発信する「だいち」と「にわ」の震災メモリアルホールを計画します。仙台に誕生するこの新しい建築は、文化と平和のシンボルとして人々のために存在します。建築の竣工はただの始まりであり、文化と平和を育み、寄り添い、生み出す場となる建築です。



## 1 建築空間の魅力と総合デザイン

■仙台ならではの「だいち」と「にわ」が「文化」と「平和」を育み、発信する  
本計画は、街にとってハレの舞台である象徴的な「だいち」(大・小ホール)とスロープ状の立体遊歩道である「にわ」空間と、そして月の満ち欠けの周期に合わせた形状を持つ5つの月屋根による構成によって、伊達政宗や五城楼を想い起す、仙台の歴史を継承する施設を提案します。「だいち」は文化拠点として音楽活動の場となるホールを中心とした機能を内包し、屋上階には展望台を設けることで、街を見下ろせる眺望の場所ともなります。「だいち」を「にわ」は、屏風状のガラスによって内外が区画され、開け放つことが可能です。さらに可動間仕切りである扉を用いることで空間の一部を区画して可変的な空間をつくることができ、「文化」と「平和」をテーマとした多様な市民活動を様々な場所で同時に進行することができる市民にとって開かれた場所となります。大・小ホールの総称である「だいち」は地面が盛り上がった地層のような自然の力強さや生命力をもつ土仕上の堅牢なRCドーム構造体とし、地下に溜めた雨水を躯体内に通することで、立体的水の循環をつくり、「にわ」は河岸段丘に呼応した形態とし、緑の屏風が立ち上がる風景をつくり、杜の大地に根付いたThe Greenest Sendaiのモデルとなる建築です。

■東日本大震災時刻の太陽光が象徴的に入り込むホール  
大ホールは走行式の客席を用いてサウンディング型コンサートホール形式かプロセニウム劇場形式を併用できる形式とし、今後の音響コンサルの意見を広く柔軟に取り入れられる計画とします。震災のメモリアルとして東日本大震災時刻の太陽光を取り込む透光可能な円筒窓をホール西側上部に設けることで、「中心部震災メモリアル拠点」を象徴する空間をつくり、



サウンディング型コンサートホール形式  
凹凸のある曲面の壁面と凹凸のある客席によって求める心のあるホールとして、床の上から見える音響の響きの場を感得されるホールです。

## 2 青葉山エリアの中で景観的位置づけ、果たすべき役割等

■仙台の「文化の軸」と「平和の軸」を結びつける建築  
敷地の南北へ続く仙台城跡から仙台第二高校まで続くラインを「文化の軸」、東西へ続く仙台湾から奥羽山脈まで続くラインを「平和の軸」と定義し、各方面に対して本建築が結節点として「文化」と「平和」の活動を街全体へ波及する計画を行います。美術館や学校、国際センター文化が波及していく「文化の軸」を定め、屋内外が連続する「にわ」での音楽やダンスなどの様々な活動によって、エリア一体で文化芸術が波及していく計画を行います。震災遺構や再整備が進む仙台駅周辺から、青葉山エリアを介して奥羽山脈まで「平和の軸」と定め、本建築を拠点に震災を風化させないための活動が広がる計画を行います。母なる大地がいつとも逃げない丘となり、人々の心の拠り所となります。

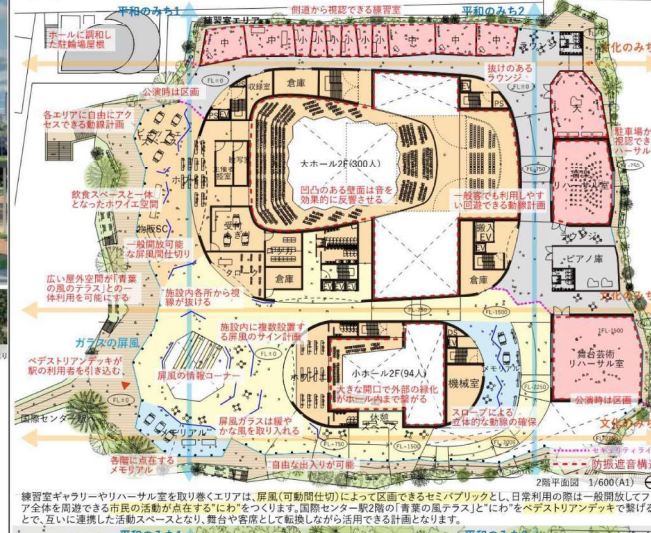
■青葉山と連続する建築とランドスケープデザイン  
広瀬川と連続した立体遊歩道となる「にわ」は、大ホールのボリュームを緩和し、周囲と比べて圧迫感のない景観を生み出します。「だいち」をつなぐ梁はゴム支柱とし、仙台の特徴となる中間帯帯林である青葉山の植生が定着する「にわ」は、選定された多様な樹種がファサードに現れ、「百年の柱」を世界に向けて発信する場となります。川と繋がる地上の「にわ」は広瀬川に生育しているケヤキやイヌシダなどを、2階以上の「にわ」は青葉山に生息しているイヌブナ・コナラなどを植生し、地域性によって、青葉山エリアの生態系を引き込む計画とします。地被類は、地上の「にわ」は広瀬川と関連が深い草丈の低い草種を本類を用いた草皮ビotopeを、2階以上の「にわ」は青葉山林緑の植生を植栽し、上層になる「にわ」は低木植栽とすることで、管理しやすい計画とします。



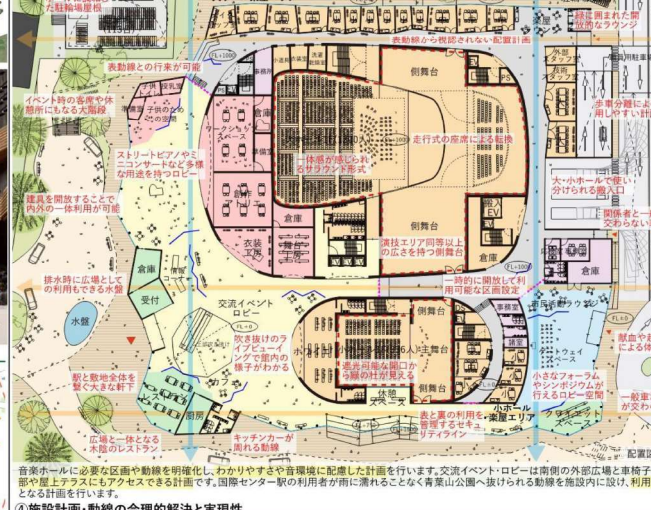
## 3 立ち寄りやすく、多様な時間を通ずる人々が共存する空間づくり

### ■「だいち」を中心に立体的なつながりをもつ「にわ」とカスタマイズ可能な屏風によって人々が創造性を生み出す空間づくり

日常と非日常の双方で人が流れ込み、気軽に立ち寄り、人々の居場所を創出する開かれた空間を計画します。  
1. 各階は両方の双方向で人が流れ込み、気流立ち寄り、東西の「文化のみち1」、東部の都市空間と接続する計画です。  
2. 各階は真正(六十二間筋)伊達藩2万石にあやかった62の扉扉によって可変的に区画し、時期や時間によって変化する市民活動を可能にする「にわ」を計画します。屏風を用いて4階を主にメモリア展示スペースやクワイエットスペースを各階に設けることができます。



接客エリアやホール・バー・ラウンジを取り巻くエリアは、屏風(可動間仕切り)によって区画できるセパレート仕切りとし、日常利用の際は一般開放してフロア全体を回遊できる市民の活動拠点とする「にわ」をつくり、国際センター・駅周辺の「青葉の風」テラスに「にわ」をペDESTリアンデッキで繋げることで、互いに連携した活動スペースとなり、舞台や客席として転換しながら活用できる計画となります。



## 4 施設設計、動線の合理的解決と実現性

### ■「にわ」を介したインクルーシブな動線計画

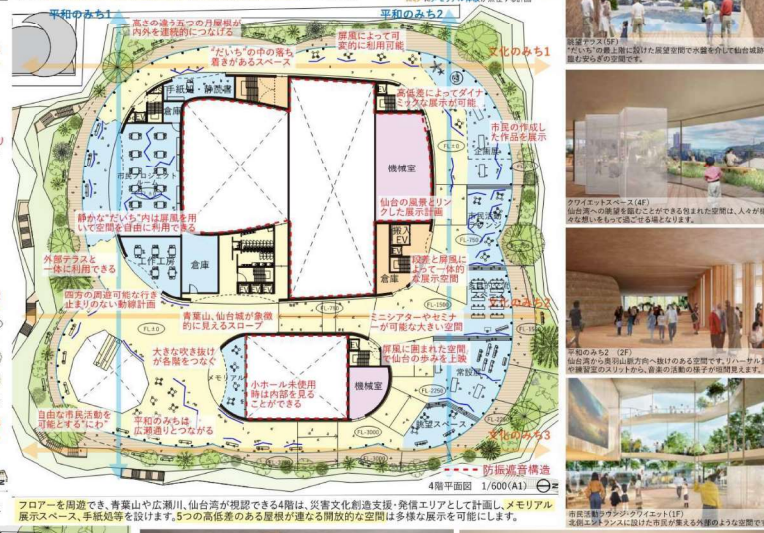
・スロープと階段で連続した「にわ」は屋内外に階段やエレベーターを分散的に配置することで、だれもが立体的に回遊できる動線を実現します。公衆トイレには斜りスロープを扉によって区画し、通時は開放可能とすることで、状況に応じたフレキシブルな対応ができる計画です。



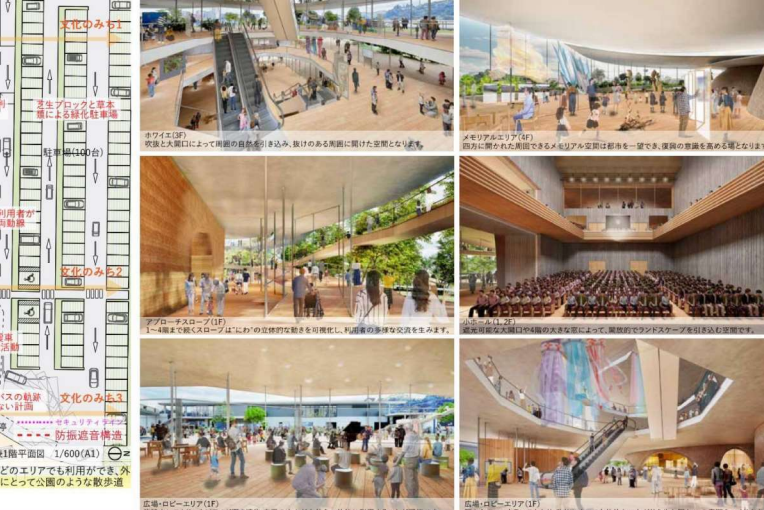
## 3 スロープ状の立体遊歩道によって階層から4階まで、緩やかに登っていく計画とします。4階までの動線の間に「文化」や「平和」の活動が分散的に視認でき、自然と活動が広がり、広がっていく計画とします。

### ■地球のエネルギーを積極的に取り入れた環境計画

・光、風、雨水など、仙台からでの自然のエネルギーを利用した設計計画とすることで、最小限のインフラコストで最大限の効果を得られる計画とします。ホール周囲の「にわ」空間は緑地のようなパッパア空調スペースとすることで、機能室やホールへの外気排熱を強化するなどランニングコストを抑えつつ、エネルギーを積極的に取り入れた計画を行います。空調設備は自然エネルギーを活用することで居住域での空調を行うとともに、災害時に天井からの天井材・設備落下がない構成とします。



フロアを周遊でき、青葉山や広瀬川、仙台湾が視認できる4階は、災害文化創造支援・発信エリアとして計画し、メモリアル展示スペース、美術館等を設けます。5つの高低差のある屏風が連なる開かれた空間は多様な展示も可能です。



## 5 防振避音構造と防災性能を考慮した「免震ダブルコア」

・大小2つのホール「だいち」は、200mm以上のRCと内壁のGRCで壁・床・屋根を囲い、高い遮音対策を施し、ホール内での固体伝播音を防止計画とします。また、これらは耐強な構造コアとして耐震性を高め、周囲のホイイズや回遊路を軽快で開放的な構造とすることができます。建物全体を免震構造とすることで大地震時にも損傷なく機能が継続できる計画とし、更に、周囲の交通振動の影響を防ぎます。

